

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2003年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学 研究科		人間関係学 専攻	
指導教員	所属・職名		氏 名	
	コミュニティ福祉学部教授		箕口 雅博 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	個人 ・ <input type="checkbox"/> 共同 <input checked="" type="checkbox"/>	5 名
研究課題	高齢者を対象とした「化粧を用いた心理的アプローチ」の実践的研究			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科 人間関係学専攻 修士1年		新村 陵子 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏 名	
	コミュニティ福祉学研究科 人間関係学専攻 修士1年		堀内 理沙	
	文学研究科心理学専攻博士 前期課程2年		円谷 久美	
	〃		田路 美子	
〃		小澤 関子		
研究期間	2003年度			
研究経費	162,222千円			

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

都内特別養護老人ホームにおいて、4名の高齢女性を対象に全6回の化粧プログラムを行い、化粧施術が個人内に影響を及ぼすだけではなく、他者とのコミュニケーションにどのような効果をもたらすかを検証した。研究手続きは以下の通りである：①対象者への事前インタビュー②コミュニケーション場面のビデオ撮影・観察③ADLをもとに評価尺度を作成し、施術前後の個人内変化の測定。以上の手続きから得られたデータをもとに分析を行なった結果、評価尺度では有意な結果は得られなかった。これは尺度の項目が短期間では変化が反映されにくい項目であったことが一因であると考えられる。またコミュニケーション場面における対象者・施設スタッフ・施設利用者の発話数を分析した結果、有意な差が見られた。このことから、化粧プログラムによって他者とのコミュニケーションが活性化されることが示唆された。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 化粧プログラム } { 高齢者 } { 実践的研究 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 問題と目的**

近年、我が国は高齢化社会を迎えている。そして、高齢化社会を迎えるにあたり、人生の最終段階をどのように生きるかは個人にとって重大な関心事であり、それを支援することも心理的ケアの役割である。田路、円谷、小澤、三嶋は、このような高齢者への心理的アプローチの中でも特に化粧を用いたプログラムに注目し、その第一歩として、それまでの先行研究の体系化を試みた(2003)。それらによれば、化粧には情動活性や、積極性の増進といった心理的効用が認められている。そのような効用はあくまでも化粧の施術対象者個人の内的変化であるが、一個人のポジティブな内的変化が起こった場合、その影響は周囲にも及ぶのではないだろうか。したがって、本研究では、施設で化粧プログラムの施術を行い、施術対象者の個人的変化を測定するとともに、その変化が、他者とのコミュニケーションにどのような効果を及ぼすかを観察法によって検証することを目的とする。

2. 研究方法

調査期間：2003年7月29日～9月27日

調査場所：都内特別養護老人ホーム

調査手続き：化粧施術対象者は、施設に依頼し希望者を募った。化粧の施術は6回を1クールとして行い、それに伴って以下の調査を行った。

- (1) 事前調査として、施術対象者に①過去の化粧経験、②現在の化粧習慣、③化粧プログラム導入にあたっての印象に関して面接を行った。
- (2) 他の利用者や施設スタッフとのコミュニケーションの量の変化を測定するため、コミュニケーションの場であるデイルームでのおやつ場面をビデオ撮影した。
- (3) 施術対象者に対する化粧プログラムの個人的効果を客観的に測定するため、評価尺度を作成した。項目は「高齢者用行動評価表」(中里・下仲・成田・本城, 1991) 全51項目より、情動活性化を反映すると思われる項目、及び化粧プログラムを導入することによって改善されると思われる項目の計23項目を抜粋した。評価は、施術導入前後に施設勤務の理学療法士が行った。

施術対象者：都内特別養護老人ホーム同フロアに入居中の女性4名

化粧施術手順：①コールドクリームを用いた顔のマッサージ、②基礎化粧(化粧水→乳液)、③化粧(ファンデーション→眉カット→眉墨→頬紅→アイシャドウ→口紅)の手順で施術を行った。アイシャドウと口紅に関しては、施術対象者に色選択を求めた。色の選択が成されない場合は、施術者が選択した。

3. 結果**3-1. 評価尺度における得点の変化**

評価尺度においては、施術群では、施術後に3人の得点が上昇した。非施術群では、施術後に3人の得点が下がった。

施術群で特に得点の上昇が顕著だった質問項目は、「一人で身だしなみが整えられる」4人中2人、「昼間からベッド、布団に横になっていることがある」4人中3人、「注意の集中と持続」4人中2人であった。

一方で、非施術群では「注意の集中と持続」が、4人中2人の得点が上昇したが、その他の項目においては変化が見られないか、あるいは得点が下がった。

結果を元に、化粧施術前後の得点差についてt検定による分析を行ったが、得点間には有意な差は見られなかった。

これは、調査期間が2ヶ月であったため、高齢者を対象として得点に反映するほどの大幅な改善は現れにくかったからであると考えられる。

しかしながら、そのようななかなか変化が現れ難い尺度においても、いくつかの項目で得点の向上がみられたということは、この化粧プログラムが個人の内的変化にプラスに影響するという先行研究を支持する結果が得られたと考えられる。

研究成果の概要 つづき

3-2. ビデオ観察

おやつ場面で撮影されたビデオを元に観察調査を行った。観察に際しては、30分のタイムサンプリング法を用い、そこで観察された対話を4つのカテゴリー(スタッフとの受動的会話・能動的会話、利用者間での受動的会話・能動的会話)に分類した。その結果を2人の評定者で分類し、一致率を算出したところ79.17%だった。ただし、被施術者の一人に関してはビデオ撮影の日におやつに参加していなかったため、データから除外した。この結果を元に、化粧プログラム導入前後の発話総数の出現率を χ^2 乗検定で分析したところ、1%水準で有意差が見られた。

発話回数の内訳としては、施術対象者—スタッフ間におけるスタッフからの声かけで始まる会話(受動的)は施術前には9回みられ、施術後には23回に増加した。施術対象者からの声かけで始まる会話(能動的)は施術前には2回だが、施術後には20回に増加した。

施術対象者—他の利用者間における他の利用者からの声かけ(受動的)は施術前には14回だが、施術後には11回であった。施術対象者からの声かけで始まる会話(能動的)は施術前には12回であり、施術後には10回であった。

施術対象者—スタッフ間における受動的な会話の増加に関しては、化粧後の変化が話題を提供し、声かけのきっかけとなった。例としては、「違いますね。10歳若返りました」「きれいになられて」「目の感じが違う。前回とはまた違った感じでね。感じが毎回違うからね。いやー素敵」などといった声かけから会話が始まった。また、スタッフと施術対象者との会話に他の利用者が加わり、スタッフが促すことによって三者関係での会話に発展することもあった。行動面においては、スタッフに対して自分の顔を指差し注目を集めようという能動的行動が見られた。

一方、施術対象者—他の利用者間では、対スタッフ間で見られたほど受動的・能動的ともにあまり変化が見られなかった。しかし、他の利用者が化粧したことに気づき、「見違えるほどきれいになった」などの発言から会話が始まる場合もあった。

これらの結果から、化粧プログラムがスタッフとの会話を促進し、スタッフとの交流の機会を増加させることが明らかになった。同時に、施術対象者を中心としてスタッフが集まり、そこから他の利用者を含んだ会話を派生させるきっかけとなることが示唆された。

4. 考察と今後の課題

本研究は、高齢者施設での化粧プログラムの実践を通して、従来の研究で述べられてきた施術対象者個人へ心理的効用に加えて、その個人を取り巻く場への影響を調査することを目的として行われてきた。

その結果、施術対象者対スタッフ間と施術対象者対他の利用者への発話数全体に変化が見られた。また、会話内容においても施術対象者を中心とした話題からさらに複数の他利用者やスタッフとの会話へと発展するという変化が見られた。このことから個人への化粧プログラムの導入が周囲の環境へと影響をもたらすのではないかと考えられる。

今後はこのプログラムをさらに継続することで、より明確な場の変化を調査していきたい。また今後の課題としては、本研究で使用した評価尺度では捉えきれなかった高齢者の変化を詳細に反映する尺度の作成が挙げられる。また、本研究では場の変化を捉えるために、発話数に焦点を当てて観察を行ったが、より多面的に場の変化を捉えるためには詳細な質的分析を行う必要があるといえる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・ 新村陵子・堀内理沙・円谷久美・田路美子・小澤関子・瀬戸サヤノ
「高齢者に対する化粧アプローチの実践」『立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要』
第2号, 2003, 21-26

④ その他

- ・ コミュニティ心理学会 第7回大会 ポスター発表 (エントリー済)
「高齢者に対する化粧アプローチの実践」